

京都ふしぎの玉手箱

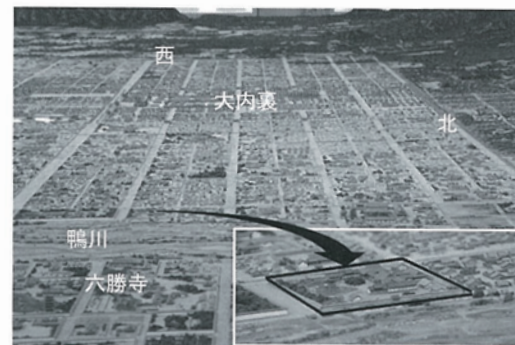
第34回

無類の桜好き、 その名も桜町中納言！

平安時代はまさに桜花全盛時代。天皇や公家僧侶などが桜を植え、それぞれ宮中や公家邸・寺社で宴を催し愛でました。その中でも、特筆すべき桜人が桜町中納言こと藤原成範。果たして成範の桜に対する思いとはどれほどのものであったのでしょうか。

文 NPO法人京都観光文化を考える会・都草

平安の昔、現代の私たちと同じように多くの公家たちも桜に心を奪われました。その代表ともいえるのが「桜町中納言」と呼ばれた平安末期の公卿、藤原成範です。



藤原成範邸があった場所(京都アスニー「平安京復元模型」)。

父は、平安時代随一の博学、藤原通憲(信西)。後白河天皇の側近で平治の乱(1159年)の原因となった人です。娘は当時宮中で美人の誉れ高く、第80代高倉天皇の寵愛を一身に集めた「平家物語」で有名な小督局。

今回は、この無類の桜好き「桜町中納言」が、桜の開花期を延ばそうと日本や中国の神様に祈念したと伝わるエピソードをご紹介します。

「天照大神」への祈り

『平家物語』には、桜町中納言は桜をこよなく愛で、邸内はもちろんのこと邸外にもあまたの桜を植えるほどで、人々はこの辺りを桜

町と呼んだとあります。古代学の権威角田文衛氏によれば、その邸は現在の草堂・下御霊神社付近にあったようです。

桜町中納言は春が巡る度に桜の木陰を立ち去らず、桜花の盛りが短いことを惜しんで、桜花の延命を「天照大神」に祈りました。天照大神は、その願いを聞き届け桜花の命を三七日(21日間)に延ばしました。桜町中納言が、この神の功德に感謝し、お社を建立したいと考えていたある夜、白羽の矢を持った神童が夢枕に現れ、「この白羽の矢を深草郷の柏原に指しておくので、そこに宮を造営しなさい」と告げました。早速家臣を連れて深草郷内を探し回り白羽の矢

を見つけ、そこに天照大神、豊受大神を勧請し神明神社(桜町大神宮)を創建、数株の桜を植えてご神木としました(駒札より)。

このご神木の桜花は、春ごとに見事に咲きその寿命も長く、洛中洛外より人々が集い、また願いごととすべて叶ったといえます。今は、ただ桜が寂しく1本咲くのみです。

後年、豊臣秀吉は文禄3(1594)年に伏見城を築城する際、城郭内にあった「佐田彦神社」をこの地に移して合祀しました。桜の美しさと桜花の寿命の長さを愛し、武運長久の祈願にも訪れ、盛大な宴も催したということです。



神明神社(桜町大神宮)地図。



境内に唯一咲く、現在の桜。



深草にある神明神社(桜町大神宮)。

「泰山府君」への祈り

もう一つの逸話は「延慶(えんきょう・えんぎょう) 本平家物語」にあります。桜町中納言が、桜花の延命を、中国の泰山の山神で生類の命を司る「泰山府君」に祈ったというお話です。



「泰山府君」の名を冠した桜。

また、世阿弥作と伝わる金剛流謡曲「泰山府君」では、桜町中納言が邸内で桜花の命を延ばすため「泰山府君」に祈っていると、天女が降り立ちあまりの桜花の美しさに枝を手折って天に昇ります。そこに「泰山府君」が現れ天女に桜の枝をもとの木に戻させ、桜町中納言の風雅な心を感じて、桜花の命を21日間に延ばすという物語です。

今年の春は、遠き平安の公卿「桜町中納言」に思いを馳せながら、「泰山府君」の名を冠した八重桜を愛でませんか？